

(基礎) 教育学コース文芸部、文芸雑誌『恐るべき大人たち』2024年度活動報告

—資本主義との綱引きの中で—

島 本 篤 ・ 増 田 涼 太

この報告は、(基礎) 教育学コース文芸部、2024年度の活動報告である。

1. はじめに——資本主義、それから「手段」と「目的」の話

いつも苦しむのは、綱引きである——とりわけ、資本主義との綱引きである。綱を断ち切れたらば、どれだけ爽快なことか。

これを「お金の問題」と言えないこともないが、そうすると話の根幹を取り逃がしてしまうことになる。すなわち、これは「金」——「経営」、「数字」、「財」の面での問題だけではない。それらはあくまで、表面に浮かんでいる光輝く「黄金」の山でしかない。「金」の問題と言うには、事はより根深く、厄介に思われる。

ところで、資本主義のその本分は、「目的」を「手段」に変えることである。もちろん、その動力は欲である（だが欲は金だけを希求するわけではない）。

資本も金も、「目的」を容易に「手段」に変えてしまう。作品を商品に、生涯をかけた業を労働に、人を人材にする。例えばマーケティングは「面白い作品」を「売れる作品」と見、「興味深い人」を「使える人材」と見る。「金」が先行するようになると、「生きがい」は「生活や裕福のための執筆作業」へ変身する。資本は、他のあらゆるモノを「食べ物」にする。

もちろん、対象を「手段」として扱うことが、いつも悪いわけではない¹⁾。逆に、互いに「手段」として扱う方が良い場合も考えられよう（「職場は職場」と割り切る方が良いこともある）。それに、「目的」と「手段」をいつも容易に区分できとも思えない。この二つは、往々にして連続し、関連し、互いに取り代わる。また行為の都度、分化されているとは限らない——むしろ、たいていはどちらであるか意識に上らないまま行為していると言うのが正しいだろう。

一方で、親しかった相手に「利用されている」と

気づいて、不快にならない人は少ないに違いない。好きな作品が急に「売れる」路線に舵を切れば、誰だって幻滅する。「目的」と「手段」の区分がまったくの無になるとも思われない²⁾。

「大人の世界にウンザリする」時、たいていはこうした原理が背後で蠢いている。

厄介なのは、現代では「手段」と「目的」が蔓のように絡み合っているということだ。少なくとも、「執筆」を続けながら「生きていく」上では。

2. 現代と出版

例えば、専業作家になるのが夢だとして——作品の執筆だけをして過ごすことが目的だとして。

理想の一つは、作品のことだけを考えて、作品のために、作品を書く、そしてそれによって生きること（生活）が可能となるような状況である。作品の質を高めることだけを考えて、執筆する生活——売れるための作品を書こうとするのではなく、作品が売れるための云々を考えることもない、そして作品を書くことだけにすべてが注がれた生活（もちろん、裕福である必要はまったくない）。それは確かに、一つの理想の形であろう。

他方、そのためには、現実にはたくさん「売れ」た方がはるかに近い位置にいる。さらにそのためには、例えばメディアに取り上げられ、SNSで一躍有名になる方がはるかに道が見える。むしろ、それが不可避となってしまっている。「売れること」、「話題になりそうな要素」……こうした側面が作品か作者になれば、商業出版は基本的にかなわないし、自費出版等でもそうした側面がなければ「作品の執筆だけをして過ごすこと」には到底、届かない³⁾。

逆に、良い作品でありさえすれば、あるいは面白い作品でありさえすれば名が立つ、という時代はも

う終わった。いくら良作であっても、地球上で波打つ膨大な情報の厚みの前には、あっけなく呑み込まれ、海の藻屑と消えてしまう他ない（おそらく、水面下には今も無数のマリンスノーが輝いているに違いない）。ごく稀に陽の光を浴びるものがあるが、それはまさに、深海に沈んだ木の葉が運良く潮流と巡り会って、水面に流れつく奇跡のようなものでしかない。

すなわち、「多くを売る」、「メディアやSNSで有名になる」といった「作品のための執筆」とっては「手段」でしかない——むしろ時に害でさえある要素が、否応にも「目的」の領域に浸水してしまっているのである。

我々のような雑誌の刊行にしても、その問題はやはり、つきまとう。

具体的な内容を挙げれば、例えば、作品の読みやすさと自分が書きたいものとの緊張、SNSの活動・販促の問題、継続的な刊行に必要な雑誌の価格と売り上げのライン・すなわちどれだけの読者に雑誌を届かせたいのか……。

それゆえ、資本主義との綱引きに、いつも悩むことになる。

3. 2024年度の活動報告

2024年度は5月に第一輯、11月に第二輯を発行・販売した。販売の場として、学内の文化祭（五月祭、駒場祭の年二回）と文学フリマ東京（学園祭と同時期に年二回）に参加した。今後も年二回発行のペースで活動する予定である。

第一輯は立ち上げメンバーのみの執筆であったが、第二輯からはコース内の他の院生も寄稿してくれるようになった。「原風景としての教育」というタイトルで院生に向けたアンケート企画も始めた。書き手の幅が広がることで、雑誌を発行することの意味も深まっていくと思う。例えば普段は論文やレポート以外の文章を書かない院生がちょっとしたエッセイを寄稿したり、査読には通らないだろうけれど書いてみたい論文（のような何か）を発表したりする機会になれば、誌面はより豊かになるだろう。書くことそれ自体の意味や楽しさに出会い直すことができれば、活動としては成功なのだろうと考えている。

活動を続けていくためには、それを維持するため

の工夫も欠かせない。今いるメンバーもいつかは活動を離れることになるし、雑誌を発行するためには書くことだけに限らない色々な仕事に伴う。こうした課題を踏まえつつ、何のために雑誌を発行するのかということも少しずつ考えていく必要がある。元々小説やエッセイ、詩を書くことの好きなメンバーで集まって始めたことではあるけれど、教育や教育学との関係についてもやはり見直すことになるかもしれない。どれだけの遠回りになるかは分からないが、私自身今後の活動を楽しみにしている。

4. おわりに

冒頭のように書き出したとして、二年目にして既にお金回りに詰まっているというわけではまったくない。

しかし、1.、2. で書いた「資本主義との綱引き」は、業界にしろ個にしろ、なんらかの「大きな転機」がない限り、常に創作全般につきまとう問題であろう。いや、これは文芸のみならず、学术界も避けては通れない問題である。仮に「資本主義的なもの」に抗うにしても、それが現実には力を持つには、「資本主義的なもの」をくぐらなければならない。「売る」ための活動に抗したいが、そのためには実際に「買われる」必要がある……逆に、名が売れた方が、解放されて書くことができるという側面もある。

「大いに売る」のが、資本主義への没入と抵抗を含んでいる。「名を売る/有名になる」ということもまた然りである。

『アリス』の物語は、ディズニー作品として描かれ直されることで、私たちの元に届き続けているのかもしれない。『ハリー・ポッター』は、日本では今なお、そのタイトルは広く知られている。それも、実写映画化されていなければ、今のような知名度になったかわからない——もちろん、それが作品や作者にとって幸せかどうかは別の問題である（『ゲド戦記』や『メリー・ポピンズ』の例にあるように）。現実に売れた、名が通ったからこそ、後に残る、これが現代の出版の現実である。

小説家として「生きていく」上で、読みたい人だけに読んでほしいとも思う一方で、できるだけ多くの人に読まれたい、とも思う。であればこそ、できるだけ後世に残り、読まれ続けていてほしいと願う。他方で、名を売った＝魂を売ったと見なされる

ことがあるのもまた、事実である。

大衆への迎合、手続きへの型はめ……その方が近道である。その近道を歩いている上で、「新しいもの」は生まれないだろうが。

簡単に迎合できればいっそラクだろう。しかし、そんなことができるならば、始めからこうした雑誌など作らない。

「出版」という業が大手出版社ですら難儀なこの時代に、すべてを「手段」に塗り潰す「力」に抗いながら、どこまで活動が続けられるのか——それが、この雑誌の一つの羅針盤であり、同時に、羅針盤の針を揺らし続ける怒濤である。

註

- 1) 勤め人の大半にとって、電車に乗ることは移動のための手段である。それで良い。駅員にとっての乗客は「客」であり、「収入」のための部分を為す——すなわち「手段」という側面を拭い去ることはできない。何百人の乗客をいちいち「目的」としてのみ扱っていけば、電車は動かなくなるだろう。
- 2) 例えばアンスコムの「問われれば答えられる」という意味において、「目的」と「手段」をひとまずは分かťことができるとするのは、それほど的外れではないだろう。
- 3) 書籍化に関しては、電子書籍を除けば、大きく二つの方法がある。編集者のお眼鏡にかなうか、お金を払うかである。前者はさらに三つに分かれ、一つは賞を取ること、二つには本人・作品が有名になること、三つには編集者と個人的な繋がりを作ること（要は商業出版である）。後者は自費・共同出版、私費印刷、そしてすべてを自分で作る——すべてを自分で作ると言っても、やはり印刷の紙やインクやら、費用がかかる。前者は、出版不況と言われる現代の中で、結局は基本的に「売るため」のものである（現代の日本では「持ち込み」を認めるところはないようである。安部公房や、比較的最近では平野啓一郎のような、作品を出版社に「持ち込む」、つまりその作品や作家の可能性に「賭け」、出版社がリスクを負うことはない）。著名人やSNSで話題となった人物が小説を書いたと言え、一定の売り上げは見込めるし、新人賞はそれだけで話題を作る（新人賞であれば、少しは「潮流から外れた」作品を認める余地を残しているだろうが、売れるかわからない異端より、主流に乗りつつ、少し差異化を含んだ作品の方が、外れがない。現に例えばエンタメ系の賞の評価項目には、「同時代性」が含まれ

ていたりする)。

(執筆分担 島本篤：1. 2. 4. 増田涼太：3.)

